

児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係

松 尾 直 博¹ 新 井 邦二郎²

RELATIONSHIP AMONG SOCIAL ANXIOUSNESS, PUBLIC SELF-CONSCIOUSNESS AND SOCIAL SELF-EFFICACY IN CHILDREN

Naohiro MATSUO AND Kunihiro ARAI

The purpose of this study was to construct the social anxiousness scale for children (SASC) and to clarify its relation between social anxiousness, self-consciousness and social self-efficacy. In the first study, 341 fourth, fifth, and sixth graders answered the original SASC items. Eighteen items was selected on the basis of item-total correlation, Cronbach's α , and factor analysis. In the second study, 195 fourth, fifth, and sixth graders answered the SASC and social anxiousness subscale of General Anxiety Test (GAT), and teacher rating of children's social anxiousness was obtained in order to test validity for SASC. Between the SASC score and GAT score and teacher rating, significant correlations were obtained. Add to this, public self-consciousness and social self-efficacy were measured, too. SASC score was positively correlated with public self-consciousness score, and negatively correlated with social self-efficacy score. It was concluded that social anxiousness might be partly determined by public self-consciousness and social self-efficacy.

Key words : social anxiousness, public self-consciousness, social self-efficacy, children.

問題と目的

不登校やいじめなどが社会的問題として注目される中, 子どもの対人関係に関する心理学的研究が数多く行われている。最近では, 子どもの社会的行動, 社会的情報処理に関する研究に加えて対人関係で生じるストレス (長根, 1991) や孤独感 (Asher, Hymel & Renshaw, 1984) などの主観的な感情にも焦点を当てた研究が行われるようになってきた。Hymel, Franke & Freigang (1985) や佐藤・佐藤・高山 (1990) が指摘しているように, 社会的行動, 社会的情報処理の側面に加えて, 社会的場面における感情傾向を測定しようとする試みは,

子どもの対人関係の問題を理解する上で不可欠であるように思われる。本研究では, 子どもの対人的諸問題の原因として, あるいはそのような問題から生じる結果として特に重要であると思われる子どもの対人不安傾向に焦点を当てる。

対人不安 (social anxiety) は, 「対人的な状況により不安になりやすい傾向」 (Argyle, 1981), 「他者からの詮索や注目, あるいは単なる他者の存在によって引き起こされる動揺や混乱」 (Buss, 1980), 「現実の, あるいは想像上の対人的場面において, 他者からの評価に直面したり, もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」 (Leary, 1983), 「対人場面で個人が体験する不安感の総称」 (菅原, 1992) などと定義されているが, 研究者間で必ずしも一致しているわけではない (菅原, 1996)。

本研究においては, Leary (1983) や菅原 (1992) の定

¹ 筑波大学心理学研究科 (Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba)

² 筑波大学心理学系 (Institute of Psychology, University of Tsukuba)

義を基に、対人場面に、実際に遭遇するだけでなく、それを予測することによっても不安が起きるという側面にも注目し、対人不安を「対人的場面に遭遇したり、あるいはそれを予測したりすることによって起こる個人の不安反応」と定義する。また、対人的場面における不安の感じやすさの個人特性を特に意味する場合は「対人不安傾向 (social anxiousness)」の用語を使用する。

Gresham (1986) は、社会的スキルの問題を社会的スキルの欠如、社会的遂行の欠如、自己コントロールのスキルの欠如、自己コントロールの遂行の欠如の4タイプに分類している。その中で、自己コントロールスキルの欠如とは、学習を妨げる情動喚起反応がスキルの獲得を阻んでいるために社会的スキルを学習していないことを指し、自己コントロールの遂行の欠如とは、スキルは学習されているが情動喚起反応に問題があるためにそれを遂行しないことを指すとしている。このような社会的スキルの獲得や、遂行の妨げになる感情として、不安や恐怖などが考えられており、対人不安が子どもの仲間関係の形成や維持において重要な意味を持つと思われる。対人場面で喚起された不安は、適切な社会的行動の遂行の妨げになり、またそのような経験を繰り返すことにより、対人的場面を回避する行動パターンが定着した場合、対人的な場面での経験はますます減少していくと思われる。

例えば、Vernberg, Abwender, Ewell & Berry (1992) は、引越しをしたばかりの12歳から14歳の子どもの対人不安傾向を測定し、対人不安が新しい友人関係を形成する際の仲間づきあいと親密さに否定的な影響を与えることを見いだしている。また、Adalbjarnardottir (1995) は、対人不安傾向の程度が、仮想場面における対人交渉方略のレベルに影響を与えていることを示唆している。この研究で特に興味深いのは、社会性の高い子ども (教師評定による測定) でも、対人不安傾向が高いものは対人交渉方略の得点が低いことが見いだされたことである。Adalbjarnardottir (1995) は、子どもの社会的コンピテンスを促進する際に、社会的に孤立してはいない子どもの対人不安傾向にも敏感になる必要があると述べている。このことは、対人不安傾向は今後対人的問題を抱えるリスクのある子どもの予測にも利用できる可能性を示唆していると言えよう。本研究の目的の1つは、児童のこうした対人不安傾向を測定するような尺度を作成し、児童の社会性を研究する際に利用できるようにすることである。

また、対人不安傾向の測定だけでなく、対人不安を

規定する要因についての研究も、いくつか行われている。それらの研究の中で、多くの研究者が対人不安傾向と公的自己意識との関連性を指摘している。公的自己意識とは自分がどのように他者から見られているかという、自己の外的側面を意識しやすい傾向であり、このような心性が対人不安傾向の背景に認められることが報告されている (eg. Buss, 1980; 菅原, 1984, 1988)。その中で菅原 (1988) は、公的自己意識の高さが、高い対人不安傾向の条件になると主張している。しかし、公的自己意識が高いからといって必ずしも対人不安傾向が高いとは限らず、公的自己意識の高い者の一部が、何らかの原因で高い対人不安傾向を有するようになることも述べている。そのような主張の根拠として、公的自己意識は対人不安傾向と正の関連が見られたが、自己顕示欲求とも正の関連が認められている (菅原, 1984)。つまり、公的自己意識の高い者は、他者から見られることを強く意識するが、それが必ずしも対人不安となるわけではなく、見られることに対する積極的姿勢である自己顕示的方向性を持つ場合もあると言えよう。したがって、高い対人不安傾向を有するには、高い公的自己意識に加えて、他の何らかの要因が関係していると考えられる。

本研究は、このような知見を基に、「公的自己意識の高さと、対人的自己効力感の低さを合わせ持つ者が、最も強い対人不安傾向を有する」という仮説について検討を試みることも大きな目的である。本研究では、対人的自己効力感を「対人的場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的な評価」と定義する。対人的自己効力感が低いことは、対人不安傾向の高さと関連があると考えられる。Leary (1983) は、「個人の望む印象を作れるかどうかの主観的確率」の低さが対人不安のレベルと関連することを指摘しているが、対人的自己効力感はこの概念に近く、それをより具体的に示したものであると思われる。公的自己意識が高く、対人的自己効力感が低い、つまり他者からの目が気になり、自分の社会的行動の遂行に自信のもてない子どもが、最も強い対人不安傾向を示すと考えられる。このような関係が明らかになれば、児童の対人不安の理解や予防に対して、何らかの示唆が得られるように思われる。

研究1 対人不安傾向尺度の作成及び信頼性の検討

目的

小石 (1995) が指摘しているように、幼児期、青年期

という他の発達段階と比較して、児童期の人間関係に対してはこれまであまり関心が払われてきていない面があるように思われる。たしかに、不登校の問題を考えても、法務省人権擁護局(1989)の調査結果によれば不登校を始めた時期は中学1年の時が最も多い。しかし、こうした問題に対しても「小学生の時代に積み上げられた親子関係や仲間関係などについての問題が、中学生という環境的变化や、また発達の節目を迎えて表面化したと考えるのが自然ではないだろうか」(小石, 1995)という指摘は妥当であるように思われる。

つまり、青年期に多くの対人的問題が起きる基盤は、児童期に蓄積されている可能性がある。また、最近では児童期そのものの対人関係に変化が起りつつあるとも言われ、児童期を対象とした対人関係についての研究も盛んになってきている。その意味で、児童期の人間関係の形成と発達に影響を与えらると思われる対人不安傾向を測定する意義は大きいと考えられる。

対人不安傾向を測定する尺度としては、成人を対象とした Buss(1980), Cheek & Buss(1981), Leary(1983) や児童を対象とした LaGreca, Dandes, Wick, Shaw & Stone (1988) などがある。しかし、わが国の児童を対象とした尺度で、対人不安傾向の測定を目的とし、信頼性および妥当性が十分に検討された尺度はないように思われる。

研究1では、児童の対人不安傾向を測定する尺度を新たに作成し、その下位構造を探るとともに、尺度の再検査信頼性、内的一貫性を検討することが目的である。なお、尺度の妥当性については研究2で行う。

方 法

被調査児 首都圏の公立小学校4年生116名(男子51名, 女子65名), 5年生121名(男子60名, 女子61名), 6年生104名(男子53名, 女子51名)の合計341名。

質問紙の構成

児童用対人不安傾向尺度 児童の特性的な対人不安傾向を測定する尺度。Buss(1980), Cheek & Buss(1981), LaGreca et al. (1988), Leary (1983) を参考に、新たに項目を作成した。回答は、それぞれの質問に対して「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」「あてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」のいずれかを選択する4件法で求められた。原尺度の項目として、37項目が作成された。

調査時期 1992年7月。

手続き 担任教師の監督の下、クラスごとに集団で実施された。最初の調査の1カ月後、各学年1クラスのみ(計110名)に対して、再検査信頼性を検討するため

に再調査が行われた。

結果および考察

I-T相関(.30以上)の値と α 係数の値を基準に(大塚(1986)の手順に従い、その項目を削除したときの α 係数が、その時点での全体の α 係数よりも高くなる項目を削除していった)、次に残った項目に対して主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、固有値1以上の3因子を抽出した。これらの3つの因子に対する負荷量が.40に満たない項目を削除した。最終的に18項目を対人不安傾向測定尺度の項目として採択した。なお、原尺度の項目数が37であるのに対して、最終的に採用した項目数が18と少ないのは、選定基準を厳しくして、信頼性の高い尺度を作成することを意図したためである。

尺度の内的一貫性を検討するためにクローンバックの α 係数を算出したところ.876の値が得られた。また、尺度の合計得点と1カ月後に行われた再調査の合計得点との相関係数は.782($p<.01$)であった。この結果から、高い再検査信頼性が確認された。

対人不安傾向の下位構造を探るために、最終的に残った18項目に対して再び主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果をTABLE 1に示す。第1因子に負荷の高い項目は、「友だちが、自分について悪口を言っていないか、気になります」「知らない人と会ったとき、その人が自分のことをいやな人と思わないか心配になります」などであり、対人的場面において否定的な評価を受けることを気にする傾向を示しており、「否定的評価懸念」因子と命名した。第2因子に負荷の高い項目は、「あまりよく知らない人から話しかけられたとき、顔が熱くなります」「みんなの前で発表するとき、どきどきします」などであり、対人的場面において生理的反応を含む情動が喚起しやすい傾向を示しており、「情動的反応性」因子と命名した。第3因子に負荷の高い項目は「だれかに話しかけられるのが、こわいです」「人がまわりにたくさんいると、いやな気分になります」などであり、人と関わることに苦痛を感じる傾向を示しており「対人関与の苦痛」因子と命名した。

それぞれの下位尺度の信頼性を検討するために、各因子に負荷の高い項目からなる下位尺度を構成し、 α 係数を算出した。その結果、否定的評価懸念下位尺度で.834、情動的反応性下位尺度で.785、対人関与の苦痛下位尺度で.675の値が得られた。また、下位尺度ごとの1カ月後の再検査との相関係数は、否定的評価懸念下位尺度で.794、情動的反応性下位尺度で.725、対人関与の苦痛下位尺度で.578であった(相関の値は全て p

TABLE 1 対人不安傾向尺度の項目分析, 因子分析の結果

	M	SD	全体 下位		因子分析結果			
			I-T	I-T	F1	F2	F3	h
友達が、自分について悪口を言っていないか、気に なります。	2.70	1.09	.622	.688	.742	.279	.069	.633
人がたくさんいるところでは、自分がいやな人と思 われないか、気になります。	2.35	1.09	.540	.616	.685	.172	.091	.507
知らない人と会ったとき、その人が自分のことをい やな人と思わないか心配になります。	2.21	1.05	.607	.657	.676	.263	.131	.543
自分のことが嫌いな人が1人でもいることは、こわ いことです。	2.23	1.09	.536	.589	.572	.270	.130	.417
みんなが私の顔を見て、笑っているような気がしま す。	1.83	0.92	.465	.550	.498	.087	.246	.316
みんなに笑われるのは、こわいです。	1.92	1.01	.520	.517	.473	.171	.297	.342
いつもだれかが、自分のことを見ているようで心配 です。	1.96	0.92	.569	.510	.435	.219	.403	.400
みんなから見られると、顔が赤くならないか心配で す。	2.04	1.05	.590	.560	.335	.567	.186	.468
あまりよく知らない人から話しかけられたとき、顔 があつくなります。	1.96	0.91	.384	.456	.087	.551	.097	.321
知らない人と会わなければならないとき、心配にな ります。	2.36	1.01	.576	.570	.247	.551	.289	.448
あまりよく知らない人と話さなければならないとき、 どきどきします。	2.48	1.12	.496	.524	.212	.527	.192	.360
おおぜい人が集まると、どきどきします。	2.18	1.06	.548	.552	.255	.479	.298	.384
授業中、先生にさされると、顔があつきます。	1.80	0.95	.450	.456	.214	.433	.187	.270
だれかに話しかけられるのが、こわいです。	1.45	0.72	.476	.510	.182	.185	.591	.416
人がまわりにたくさんいると、いやな気分になりま す。	1.65	0.88	.373	.431	.017	.225	.558	.362
たくさん人が集まる所には、行かないようにし ています。	1.65	0.81	.344	.424	.076	.163	.471	.254
学校の外で、クラスの人と会ったとき、いやな気分にな ります。	1.49	0.81	.336	.417	.145	.073	.461	.239
すぐく仲のよい友達以外は、話をするのがこわい です。	1.45	0.77	.426	.371	.265	.163	.408	.240
2乗和					2.93	2.10	1.91	6.92
寄与率					16.3	11.7	10.6	38.6

全体 I-T 尺度全体得点との I-T 相関値 (I-T 相関値は全て 1%水準で有意であった)

下位 I-T 下位尺度得点との I-T 相関値 (I-T 相関値は全て 1%水準で有意であった)

F1 否定的評価懸念因子

F2 情動的反応性因子

F3 対人関与の苦痛因子

<.01 で有意)。

3 つの下位尺度間の相関係数を算出したところ、否定的評価懸念と情動的反応性との間に .563 ($p<.01$)、否定的評価懸念と対人関与の苦痛との間に .621 ($p<.01$)、情動的反応性と対人関与の苦痛との間に .554 ($p<.01$) という値が得られ、有意な正の相関が認められた。

因子分析の結果、3 因子が抽出され対人不安傾向測定尺度が下部構造を持つことが示されたといえよう。さらに、それぞれの下位尺度は高い信頼性を示した。しかしながら、18 項目からなる尺度全体の α 係数が高いことから、単一の尺度としての有用性もあると思われる。全般的な対人不安傾向を測定する際には、1 つの尺度として使用し、より詳細な対人不安傾向を測定する際には、「否定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」の 3 つの下位尺度ごとに測定することも可能であると思われる。

LaGreca et al. (1988) の結果と今回の結果とを比較すると、「否定的評価懸念」は両尺度で認められ、否定的評価懸念が対人不安傾向において安定して抽出される重要な次元であることを示していると思われる。La-Greca et.al. (1988) における「対人的回避と苦痛」は、今回の研究では「情動的反応性」「対人関与の苦痛」の 2 つの因子に別れた。これは、今回の研究の質問項目の中に対人恐怖症に近いような、他者との接触において強い苦痛を示す内容が含まれていたからであると思われる。

また、対人不安傾向尺度の得点と、3 つの下位尺度の得点について、性差と学年差の検討を行うために 2 要因の分散分析を行った。それぞれの尺度の性別、学年別の得点を TABLE 2 に示した。

TABLE 2 対人不安傾向尺度得点の平均値 (標準偏差) (対人不安傾向全体)

	4 年生	5 年生	6 年生
男子	36.8(10.7)	37.2(10.7)	37.6(9.9)
女子	41.0(10.7)	44.9(10.7)	42.1(11.1)
(否定的評価懸念下位得点)			
	4 年生	5 年生	6 年生
男子	11.3(4.5)	12.0(4.3)	11.4(3.8)
女子	13.5(4.2)	15.6(4.3)	14.7(4.6)
(情動的反応性下位得点)			
	4 年生	5 年生	6 年生
男子	16.9(5.2)	16.8(5.7)	18.0(5.6)
女子	18.2(5.5)	19.7(5.8)	18.1(5.3)
(対人関与の苦痛下位得点)			
	4 年生	5 年生	6 年生
男子	8.6(2.5)	8.5(2.7)	8.2(2.5)
女子	9.3(2.8)	9.5(2.4)	9.3(3.2)

対人不安傾向尺度全体の得点の分散分析の結果、性の主効果のみが認められた($F(1,335)=23.1, p<.01$)。下位尺度ごとに見てみると、否定的評価懸念下位尺度では、性($F(1,335)=42.8, p<.01$)と学年($F(2,335)=3.3, p<.05$)の主効果が認められた。学年についてのLSD法による多重比較の結果、4年生と5年生、6年生と5年生の間に有意な差($p<.05$)が認められ、5年生のみが高い値を示していた。情動的反応性下位尺度では、性の主効果のみが認められた($F(1,335)=6.9, p<.01$)。対人関与の苦痛下位尺度でも、性の主効果のみが認められた($F(1,335)=10.2, p<.01$)。

このような結果から、対人不安傾向は男子よりも女子の方が高く、小学4、5、6年では学年による差はあまり見られないということが全体としては言えると思われる。しかしながら、否定的評価懸念下位尺度では、学年による差が見られた。この結果については、さらに検討する必要があると思われる。

研究2 対人不安傾向とそれを規定する他の要因との関連

目的

公的自己意識(public self-consciousness)は、自己意識の中でも、自分の容姿、行動、発言などに対する他者からの評価に注意を向け、重視する傾向である。菅原(1988)は、公的自己意識の高さが、高い対人不安傾向には必要であると主張している。しかし、公的自己意識が高いものが全て高い対人不安傾向を示すわけではなく、何らかの他の要因が重なった場合に対人不安傾向が高くなるように考えられる。

Leary(1983)は、対人不安の原因とその治療に関する考え方は、大まかに言って3つの理論に分類できているとしている。第1は、「条件づけられた不安」の考え方である。これは、古典的条件づけのモデルを対人不安に広げたもので、特定の場面で生じた否定的な経験が、その後の同様な状況におかれた場合に不安を引き起こすという考え方である。第2は、社会的スキル欠如アプローチである。社会的スキルの乏しい人は、社会的場面において不快な経験をすることが多く、その結果、対人的場面で不安を感じるようになるというのである。第3は、「認知的側面」を重視する考え方である。対人不安は、客観的に見て社会的スキルが不足しているから起きるのではなく、主観的に自分のスキルが不足していると感じているときに起こるという考え方である。

本研究では、このLeary(1983)の第3の考え方を基

に、自分が社会的に有能でないという主観的な認知が対人不安傾向に影響を与えているかを検討する。そのために、まず自分がどの程度社会的に有能かについての主観的な認知を測定する対人的自己効力感尺度を作成する。その後、高い公的自己意識に低い対人的自己効力感が重なった個人において、最も強い対人不安傾向が存在する、という仮説についても検証したい。さらに、研究1で検討できなかった対人不安傾向尺度の併存的妥当性についても検討する。

方法

被調査児 公立小学校の小学4年生65名(男子34, 女子31)、小学5年生68名(男子34, 女子34)、小学6年生62名(男子36, 女子26)の合計195名。

質問紙

- 1. 対人不安傾向尺度** 研究1で信頼性が検証された「対人不安傾向尺度」。項目数は18で、回答は4件法で求められた。
 - 2. 田研式GATの対人的不安傾向下位尺度** 研究1で扱われなかった併存的妥当性を検証するために、GATの対人不安傾向下位尺度を使用した。GATは、学習不安傾向、対人的不安傾向、孤独傾向、自罰傾向、過敏傾向、身体的徴候、恐怖傾向、衝動傾向の8の下位尺度から構成されており、対人的不安傾向の下位尺度は10項目からできている。そのうち内容が研究1で作成した対人不安傾向の項目と酷似している2項目を削除し8項目を使用した。語尾の文章表現を改め、回答は4件法で求められた。得点が高いほど、対人的不安傾向が強いことを示す(APPENDIX 参照)。
 - 3. 公的自己意識尺度** 桜井(1992)の児童用自己意識尺度の中から、公的自己意識の9項目を使用。語尾の文章表現を改め、回答は、4件法で求められた。得点が高いほど、公的自己意識が高いことを示している(APPENDIX 参照)。
 - 4. 対人的自己効力感尺度** 友人との対人的場面において、適切な社会的行動をどの程度自分がうまくできると思うかについての主観的評価を測定することを目的とした質問紙で、Wheller & Ladd(1983)などを参考に新たに作成した16項目からなる。回答はそれぞれの行動が、「絶対できると思う」「たぶんできると思う」「たぶんできないと思う」「絶対できないと思う」のいずれかを選択する4件法で求め、得点が高いほど対人的自己効力感が高いことを示す(TABLE 3 参照)。
- 対人不安傾向の教師評定** 対人不安傾向尺度の妥当性の検討のために、それぞれの児童が人と接する場面でどの程度不安を示すかについて担任の教師に5段階で

TABLE 3 対人的自己効力感尺度の項目分析結果

	M	SD	負荷量 [*]	共通性	I-T 相関 ^{**}
1 何人かの友だちが遊びたいとき、自分もいっしょに遊んで よいかたずねる	3.33	0.81	.578	.672	.500
2 何人かの友だちが遊び方について話しています。その友だちに「こ うすればいいと思うよ」とやり方を教える	3.04	0.79	.611	.401	.545
3 あなたの友だちがいじめられているとき、いじめている人にやめる ように言う	3.04	0.86	.642	.551	.570
4 あなたが何か遊びを始めようとしているとき、他の人に「いっしょ に遊びよう」ときそう	3.36	0.84	.569	.459	.497
5 誰かがあなたの順番を横どりしようとしたとき、「僕の番だよ、ぬか さないで」と言う	3.54	0.71	.588	.667	.511
6 並んでいる列で、だれかがあなたの前に横から入ってきたとき、 「ちゃんと並んで」と言う	3.42	0.78	.638	.606	.562
7 あなたの友達どうしがけんかしているとき、それを止める	2.91	0.94	.731	.683	.667
8 何人かの人が、あなたの友だちをからかっているとき、やめるよう に言う	2.92	0.89	.720	.674	.651
9 何人かの人が、いっしょに遊ぶ人をさきがしているとき、自分がいっ しょに遊んでよいか聞く	3.18	0.88	.605	.598	.533
11 体育の授業で、2人組にならなければならないとき、だれかにいっ しょに組になろうとたのむ	3.58	0.68	.652	.472	.581
12 何人かの友だちが、何して遊ぶか決めていて、あなたのやり たい遊びを言う	3.26	0.87	.570	.473	.495
13 あなたがだれかに文句を言われたとき、それをやめるように言う	2.95	0.89	.614	.583	.546
14 友だちにじょうだんを言って笑わせる	3.03	1.03	.584	.414	.513
15 だれかが、あなたを困らせることをしようとしているとき、「やらな いで」と言う	3.06	0.91	.685	.556	.619
16 けんかしている友だちを仲直りさせる	2.59	0.97	.608	.676	.538

^{*} 第1主成分への負荷量^{**} I-T相関値は全て1%水準で有意であった

評定するように求めた。それぞれの児童に対して、「1 全く不安は示さない」「2 ほとんど不安は示さない」「3 どちらともいえない」「4 少し不安を示す」「5 かなり不安を示す」のいずれかを評定するように求めた。

調査時期 1994年1月。

手続き 質問紙は、担任教師の監督のもと、集団で実施された。なお、今回新たに作成した対人自己効力感尺度については、各学年1クラス（計95名）に対して、再検査信頼性を確認するために1カ月後に再度実施した。

結 果

対人的自己効力感尺度の信頼性・妥当性の検討 本研究で新たに作成した対人的自己効力感尺度の信頼性を検討するために、以下のような分析を行った。まず、対人的自己効力感尺度は、対人的場面においてどの程度自分が適切に行動できるかどうかの全般的な自己評価を測定することを目的に作成したので、1次元構造

を仮定し、主成分分析を行った。その結果、項目10を除いたほかの全ての項目が第1主成分に対して高い負荷量を示した。また、それぞれの項目の得点と、その項目を除いた尺度全体の得点とのI-T相関を算出したところ、項目10を除いて.40以上の高い値を示した（項目10のI-T相関の値は.351）。

このような結果から、項目10を除き、再び主成分分析を行った。その結果、全ての項目が第1主成分に最も高い負荷量を示し、累積寄与率は39.5%であった。また、I-T相関を算出したところ、全ての項目で高い値が得られた（TABLE 3）。項目10を除いた15項目からなる尺度の α 係数は.888で、高い内的一貫性が認められた。したがって、これら15項目からなる尺度を対人的自己効力感尺度として使用し、15項目の合計得点を対人的自己効力感得点とする。

加えて、これら15項目の合計得点と1カ月後に実施した再検査での合計得点との相関係数を求めたところ.710 ($p<.01$) であった。したがって、対人的自己効力感尺度に高い再検査信頼性が確かめられたと言えよう。

また、対人的自己効力感の性差と学年差を検討するために、対人的自己効力感得点について性と学年による2要因の分散分析を行った。性、学年別の平均値をTABLE 4に示した。その結果、性による主効果のみが認められ($F(1,166)=4.7, p<.05$)、女子の方が男子よりも対人的自己効力感得点が高いことが明らかになった。

TABLE 4 対人的自己効力感得点の平均値（標準偏差）

	4年生	5年生	6年生
男子	43.4(7.7)	44.4(9.2)	42.9(6.9)
女子	46.4(5.8)	44.6(7.8)	47.9(5.5)

使用したその他の尺度の信頼性の検討 GATの対人的不安傾向尺度と公的自己意識尺度の内的一貫性を検討するために、 α 係数を算出した。その結果、GATの対人不安傾向尺度は.748、公的自己意識尺度は.879とそれぞれ高い値が得られた。

対人不安傾向尺度の併存的妥当性の確認 研究1で作成された対人不安傾向尺度の併存的妥当性を確認するために、GATの対人的不安傾向得点との相関係数を求めた。その結果、 $r=.697$ ($p<.01$) の値が得られ、高い併存的妥当性が示された。また本研究で作成された対人不安傾向尺度の得点と教師評定得点との相関係数を算出した結果、 $r=.269$ ($p<.01$) の値が得られ、有意ではあったが、あまり高い値は得られなかった。子どもの感じる対人不安のような内的側面は、教師から

正確にはとらえることが困難であると思われ、同じように子どもの内的側面と教師評定とを検討した研究においても、あまり高い値が得られないことが報告されている (eg. 桜井, 1992)。したがって、今回得られた .269 という数値は、満足すべきものであると考えられる。

加えて、研究 1 で作成した尺度の下位尺度ごとに GAT の対人的不安傾向得点との相関係数を求めたところ、否定的評価懸念との間に .714 ($p<.01$)、情動的反応性との間に .534 ($p<.01$)、対人的関与の苦痛との間に .492 ($p<.01$) の値が得られた。また、各下位尺度と教師評定との相関係数を求めたところ、否定的評価懸念との間に .204 ($p<.01$)、情動的反応性との間に .328 ($p<.01$)、対人関与の苦痛との間に .153 ($p<.05$) の値が得られた。これらの結果を総合して、各下位尺度も併存的妥当性が示されたと言えよう。

対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係 対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係を検討するために、ピアソンの相関係数を算出した。その結果、対人不安傾向と公的自己意識との間に .721 ($p<.01$)、対人不安傾向と対人的自己効力感との間に -.246 ($p<.01$) の相関が見られた (TABLE 5)。なお、公的自己意識と対人的自己効力感との間の相関係数は -.007 であり、無相関であった。

対人不安傾向の下位尺度ごとに同様の分析を行った結果、否定的評価懸念と公的自己意識との間に .764 ($p<.01$)、対人的自己効力感との間に -.125 ($p<.05$) の相関値が得られた。情動的反応性と公的自己意識との間に .576 ($p<.01$)、対人的自己効力感との間に -.238 ($p<.01$) の相関が見られた。対人関与の苦痛と公的自己意識との間に .431 ($p<.01$)、対人的自己効力感との間に -.249 ($p<.01$) の相関が見られた (TABLE 5)。

さらに、公的自己意識と対人的自己効力感を説明変数、対人不安傾向を予測変数として重回帰分析を行った。その結果、公的自己意識の標準偏回帰係数 (β)

TABLE 5 対人不安傾向と対人的効力感、公的自己意識との関係

	対人不安傾向尺度(全体)		下位尺度					
			否定的評価懸念		情動的反応性		対人関与の苦痛	
	r	β	r	β	r	β	r	β
対人的効力感	-.246**	-.227**	-.125*	-.120*	-.238**	-.228**	-.249**	-.246**
公的自己意識	.721**	.697**	.764**	.749**	.576**	.555**	.431**	.405**
R (重回帰係数)		.739**		.739**		.604**		.475**

* $p<.05$ ** $p<.01$

は .697 ($p<.01$)、対人的自己効力感の標準偏回帰係数は -.227 ($p<.01$) でいずれも高い値を示した。

下位尺度ごとに同様の分析を行ったところ、否定的評価懸念と公的自己意識との間に .749 ($p<.01$)、対人的自己効力感との間に -.120 ($p<.05$) の標準偏回帰係数が得られた。情動的反応性と公的自己意識との間に .555 ($p<.01$)、対人的自己効力感との間に -.228 ($p<.01$) の標準偏回帰係数が得られた。対人関与の苦痛と公的自己意識との間に .405 ($p<.01$)、対人的自己効力感との間に -.246 ($p<.01$) の標準偏回帰係数が得られた (TABLE 5)。

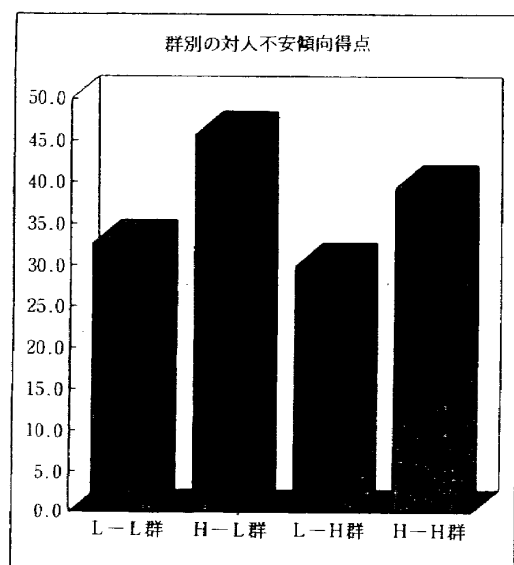
したがって、公的自己意識、対人的自己効力感ともに対人不安傾向と関連があり、公的自己意識と対人的自己効力感の間には関連がみられないことから、これら 2 つの変数は、独立して対人不安傾向に関与している重要な変数であると考えられる。

こうした結果を基に、さらに次のような分析を行った。公的自己意識得点、対人的自己効力感得点の平均値で被調査児を高群、低群に分け、その組み合わせで、L-L 群、H-L 群、L-H 群、H-H 群の 4 群に分け、4 つの群の対人不安傾向得点の平均値の差の比較を行った。分散分析の結果、群の有意な主効果がみられた ($F(3,175)=37.4, p<.01$)³。LSD 法による多重比較の結果、全ての群の間に有意な差がみられた ($p<.05$)。

最も、対人不安傾向が高かったのは、H-L 群 ($M=45.7, SD=8.4, N=46$: 男子 22 名, 女子 24 名) であり、続いて H-H 群 ($M=39.9, SD=8.9, N=44$: 男子 14 名, 女子 30 名)、L-L 群 ($M=32.6, SD=6.6, N=37$: 男子 28 名, 女子 9 名)、最も対人不安傾向が低かったのが L-H 群 ($M=29.9, SD=6.5, N=45$: 男子 25 名, 女子 20 名) であった。したがって、公的自己意識が高く、対人的自己効力感が低い群が最も高い対人不安傾向を示し、反対に公的自己意識が低く、対人的自己効力感の高い群が最も低い対人不安傾向を示すということが示された (FIGURE 1)。

4 群の下位尺度ごとの得点の比較を行ったところ、否定的評価懸念 ($F(3,175)=36.5, p<.01$: LSD 法による多重比較の結果、全ての群間で有意な差) と情動的反応性 ($F(3,173)=19.7, p<.01$: LSD 法による多重比較の結果、全ての群間で有意な差) では対人不安傾向全体と同じ結果が得られた。対人

³ 研究 1 で対人不安傾向に性差が認められたために、同様の分析を男女別に行った。その結果、ともに男女こみに分析したときと同様の群の主効果 (男子 ($F(3,86)=17.1, p<.01$)、女子 ($F(3,78)=18.5, p<.01$))、群間の得点の高低が見られた。したがって、本研究では結果を分かりやすくするために、男女をこみにした分析のみを記載する。



L-L群：公的自己意識が低く，対人的効力感が低い群
 H-L群：公的自己意識が高く，対人的効力感が低い群
 L-H群：公的自己意識が低く，対人的効力感が高い群
 H-H群：公的自己意識が高く，対人的効力感が高い群

FIGURE 1 公的自己意識，対人的自己効力感による群別の対人不安傾向得点の比較（縦軸は対人不安傾向得点の値）

関与の苦痛では，群の主効果が認められ ($F(3,177)=13.7, p<.01$)，群の得点の高さの順序は対人不安傾向全体，他の下位尺度と同じであったが，LSD法による多重比較の結果，H-L群と他の3群との間にのみ有意な差が認められた。このように下位尺度ごとに見た場合でも，対人不安傾向全体と同じように，高い公的自己意識と低い対人的自己効力感とが重なった場合に最も得点が高くなることが明らかにされた (TABLE 6)。

考察

対人不安傾向尺度の得点と GAT の対人的不安傾向尺度との間に高い相関がみられ，研究1で新たに作成した対人不安傾向尺度の併存的妥当性が確認されたこと

TABLE 6 対人不安傾向尺度の下位得点についての群別平均（標準偏差）

	否定的評価懸念	情動的反応性	対人関与の苦痛
L-L群	11.4(2.9)	13.3(3.2)	7.9(2.1)
H-L群	17.5(4.1)	17.6(4.0)	10.3(2.6)
L-H群	9.6(2.9)	11.2(3.4)	7.3(2.1)
H-H群	15.5(4.5)	15.9(4.2)	8.3(2.7)

L-L群：公的自己意識が低く，対人的効力感が低い群

H-L群：公的自己意識が高く，対人的効力感が低い群

L-H群：公的自己意識が低く，対人的効力感が高い群

H-H群：公的自己意識が高く，対人的効力感が高い群

いえよう。また，教師評定の得点との間には.269という有意な正の相関が見られた。この値が，有意ではあったがそれほど高い値でなかった理由として，対人不安傾向が，個人の感情や他者からは見えにくい特性であることが考えられる。

研究1の再検査信頼性，クローンバックの α 係数による内的一貫性と併せて，研究2で併存的妥当性が確認されたことにより，対人不安傾向尺度は高い信頼性，妥当性が認められたと言えよう。対人不安傾向尺度は下位尺度ごとでも，全体としても信頼性，妥当性が検証されたため，下位尺度を使用するか，合計得点を使用するかは目的によって選択することが可能であると考えられる。

今回新たに作成された対人的自己効力感尺度は，高い内的一貫性と再検査信頼性が確認され，信頼性の高い尺度であると言えよう。また，性差が認められ，女子の方が男子よりも得点が高いという結果が得られた。これは，女子の方が社会的で，人との関係を重視するという特質と関連があると思われるが，性差を解釈するためには今後更なる研究が必要であると思われる。

相関分析，重回帰分析の結果，対人不安傾向は公的自己意識と正の有意な関係，対人的自己効力感とは有意な負の関係が見られた。対人不安傾向と公的自己意識との間に高い正の相関が見られたことは，「高い公的自己意識が対人不安の土壌となる」という菅原 (1988) の考えと符合したことになる。公的自己意識は，他者からの視線，評価を意識する傾向であり，他者からの評価されることに対する不安とも定義できる対人不安と強い関連を持つことは首肯できる。さらに，対人不安傾向と対人的自己効力感との間に有意な負の相関が見られたことは，対人不安が主観的に自分の社会的スキルが不足していると感じていることによって起こるという，Leary (1983) の考えとも符合する。

また，公的自己意識の高低，対人的自己効力感の高低で4群に分け，対人不安傾向の平均の差を比較した分散分析によって，公的自己意識が高く，対人的自己効力感が低い群が最も対人不安傾向が高いという結果が得られた。このことは，「公的自己意識の高い者の一部が，何らかの原因で対人不安傾向を有するようになる」という菅原 (1988) の考えを一步進めるものとして重要であると思われる。すなわち，公的自己意識が高いといて，必ずしも高い不安傾向を示すわけではなく，むしろ自己顕示の方向へ現れる場合もあることが指摘されている。今回の結果から「高い公的自己意識という土壌に加えて，自分の社会的スキル効力感がもてな

いという条件が重なったときに対人不安傾向が生じる」と考える可能性も示された。4つの群の中で男女の比率が偏っている群もあったが，最も対人不安傾向が高いH-L群（公的自己意識が高く，対人的自己効力感が低い群）の男女比がほぼ等しいことから，これらの結果は性別に関係なく当てはまると思われる。

幼い頃から対人不安傾向が高く，その傾向を持続して持ち続ける場合もあるが，幼い頃は非常に積極的で，社交的だった子どもが，急に高い対人不安傾向を表わす場合もある。本研究で得られた結果から推測すると，後者の場合，もともと高い公的自己意識という土壌を持っていたのだが，何らかのきっかけで対人的自己効力感が低下した結果，対人不安傾向を有するようになったとも考えられる。対人不安傾向の発生のメカニズムについては様々な要因が関連していると思われる，今後さらに多くの視点からとりあげた研究が期待される。また，今回作成した対人的自己効力感尺度の内容は，主に主張的行動や葛藤の解決行動に関するものであり，その他の社会的スキルに対する主観的評価との関連も検討する必要があると思われる。

研究1と研究2で子どもの対人不安傾向を測定する尺度が作成され，信頼性，妥当性が確認された。この尺度を用いて対人的場面で問題を持ちやすい子どものスクリーニングや対人的困難を持つ子どものアセスメントに利用されることが期待される。研究2では，対人不安傾向と公的自己意識，対人的自己効力感との関連が示された。このような関連をさらに検討するような研究が行われれば，対人不安傾向の低減のために臨床的に応用されることも期待される。例えば，Slee (1994) は，いじめられた経験と対人不安傾向との間に有意な正の関係を見いだしている。いじめが深刻化している日本でも，いじめられた子どもに対する心理的援助活動を考案していく上で，対人不安の発生メカニズムの解明および予防的介入などが重要な役割を果たすように思われる。

引用文献

- Adalbjarnardottir, S. 1995 How schoolchildren propose to negotiate : The role of social withdrawal, social anxiety, and locus of control, *Child Development*, **66**, 1739—1751.
- Argyle, M. 1981 Social competence and mental health. In M.Argyle (Ed.) *Social Skill and Health*. Methnen.
- Asher, S.H., Hymel, S., & Renshaw, P.D. 1984 Loneliness in children. *Child Development*, **55**, 1456—1464.
- Buss, A.H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. Freeman.
- Cheek, J.M., & Buss, A.H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330—339.
- Gresham, F.M. 1986 Conceptual issue in the assessment of social competence in children. In P.Strain, M.Gurolnick, & H.Waiker(Eds.), *Children's social behavior : Development, assessment, and modification*. Academic Press.
- 法務省人権擁護局 1989 不登校児の実態について—不登校児人権実態調査結果報告 大蔵省印刷局
- Hymel, S., Franke, S., & Freigang, R. 1985 Peer relationships and their dysfunction : Considering the child's perspective. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **3**, 405—415.
- 小石寛文 1995 人間関係の発達心理学3 児童期の人間関係 培風館
- LaGreca, A.M., Dandes, S.K., Wick, P., Shaw, K., & Stone, W.L. 1988 Development of the social anxiety scale for children : reliability and concurrent validity. *Journal of Clinical Child Psychology*, **17**, 84—91.
- Leary, M.R. 1983 *Understanding social anxiety : Social, personality, and clinical perspectives*. SAGE Publications, INC. (リアリー著 生和秀敏監訳 1990 対人不安 北大路書房)
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象として—教育心理学研究, **39**, 182—185.
- 大塚雄作 1986 テスト項目の構造を探る 海保博之編 心理・教育データ解析法10講 応用編 福村出版
- Slee, P.T. 1994 Situational and interpersonal correlates of anxiety associated with peer victimization. *Child Psychiatry and Human Development*, **25**, 97—107.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85—94.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 1990 仲間関係に問題をもつ子ども—自己知覚測度による分析—宮崎大学教育学部紀要 教育科学, **68**, 9—18.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度(self-consciousness)日本

語版作成の試み 心理学研究, 55, 184—188.

菅原健介 1988 対人不安研究における公的自己意識の意義について 東京都立大学人文学報, 196, 103—116.

菅原健介 1992 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, 7, 19—28.

菅原健介 1996 対人不安と社会的スキル 相川充・津村俊充編 対人行動学研究シリーズ 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する 誠心書房

田中教育研究所人格研究部 1968 田研式 GAT 日本文化科学社

Vernberg, E.M., Abwender, D.A., Ewell, K.K., & Berry, S.H. 1992 Social anxiety and peer relationships in early adolescence : A prospective analysis. *Journal of Clinical Child Psychology*, 21, 189—196.

Wheller, V.A., & Ladd, G.W. 1983 Assessment of children's self-efficacy for social interactions with peers. *Developmental Psychology*, 18, 795—805.

(1996.12.3 受稿, '97.9.9 受理)

APPENDIX

GAT の対人不安傾向下位尺度の項目

・家に帰ってから、友だちが自分の悪口を言っているような気が

することがある。

- ・お父さんやお母さんにしかられると、いつまでも、くよくよ気にします。
- ・ゲームやスポーツなどで、負けそうなときは、やるのがいやになります。
- ・何かいわれて、いやな気持ちになることがよくあります。
- ・学級の役いんになるのは、とても心配です。
- ・仕事や勉強をしているとき、だれか他の人が見ていると気になります。
- ・しかられると、とてもいやな気持ちになります。
- ・先生にしかられると、いつまでも気になります。

公的自己意識尺度の項目

- ・自分の言ったことを、人がどう思うか気になります。
- ・かみがたや服そうには、気を使います。
- ・自分の顔やスタイルが気になります。
- ・自分についてのうわさが気になります。
- ・みんなの前で何かするとき、自分の動作やかっこうが気になります。
- ・何かしているとき、みんなが自分を見ているような気がします。
- ・自分が他の人にどう思われているか、気になります。
- ・はじめて会った人には、なるべく自分のよいところばかりを見せようと、努力します。
- ・人が自分のことについて何か言っていると、とても気になります。